

# 天路歷程

アイザック・ササキ

## はしがき

[1] 初めに私が書き物をしようとペンを手に取った時、このように本になるとは全く考えていなかったし、そればかりかこの他にもしていることがあり、この本がほぼ完成したときでさえも私は気付きませんでした。

それは次のようでした。

この世のクリスチャン達の歩む道と旅を書くうちに※1、思わず私が書きとめたことがらが二十以上あったのですが、それが旅路と栄光の道を扱った例え話となりました。

この状態で、さらに二十位は頭にあったのですが、それはますます増えていき、まるで炭火から火花の飛ぶようでした。ある時点で、生むのを止めなければ、別の本に分けて書かなければならないほどでした。そうしなければ、無限に生んで、既に書き始めたこの本を食いつくしてしまうかもしれないからです。

さて、このような状態ですが、私は、私のペンとインクを世に示そうと思います。なぜだか知らないが本を書くことのみを考えています。また、当初はこれによって誰かを喜ばそうとは思ってなくて、自分のために書き始めました。このようないたずら書きに暇な時を用いれば、私に妨げとなる悪い思いから避けることができると思ったからです。

[2] それでは、紙にペンを走らせて、速やかに考えを述べたいと思います。白と黒とに。

その構想の端糸をつかんで引っ張るとそれはやって来るので、それを書き記すことを続けていたら、ついには立派なものとなりました。

その後、私はこの端糸をまとめた物を人に見せて、その人の感想を聞いてみると、これを生かせ、いや殺せ、ジョンこれを出版しろ、いやするな、皆の益になる、いやならない、等意見はまちまちでした。

そこで、私は窮地に立ちました。どちらが最善なのかわからなかったからです。

[3] 色々考えた結果、とにかく出版してみることにしました。

思うに、同じ道を走らない者もいれば、出版を望む者もいます。誰が一番良い忠告を与えてくれたのかを見る為に、こうして試してみるのがいいでしょう。

またこうも思いました。出版に反対する者らに従ってしまうと、皆さんの大きな喜びとなるべきものを妨げることになってしまうかも知れません。

その彼らに向かって伝えたい。あなた方の意見に背くのは残念ですが、このようにすることを喜んでくれる友人もおり、この先どうなるかを見るまで是非を控えて頂きたいのです。読みたくないなら捨ててください。肉を好くのも、骨をつつくのも、人の好みはさまざまでしょう。

また、彼らをなだめるために、私の意見を述べさせて下さい。

[4] このような比喩表現や考えを批判されることにより、私の目的である皆さんの益を失いかねないのです。これが是非を控えて頂きたい理由です。

暗雲には水があるが、明雲にはない。だが銀の雫を降らしたなら、地は作物を生み出し、双方を讃え、片方を批難することはない。

まことに、その区別はつきがたく、誰でもこれを見分けることは難しいのです。

皆さんは知っていると思います。漁師たちの魚を獲る方法を。何て凝った仕掛けでしょうか。いかに知恵がしぼられているかをご覧ください。罾や糸、針や掛針、網を。しかし、それらを用いても獲ることができない魚もいます。まさぐって、様々な手段を講じてやっと獲ることができる。

狩猟者もなんとさまざまな手段を講じています。あえて語ることもないでしょう。銃に網、鳥もち、火に鈴。彼らは這い、歩き、また立つ。その身のこなしを誰が数えることができますか。しかし、これらの技を全て用いても、彼らはその望むすべての鳥を獲ることはできません。例え、笛と呼び子を用いたとしても、です。

もし真珠がヒキガエルの頭に宿っていたとして、さらに牡蠣の殻にもあったならば、価値のないものが金に勝るものを含んでいることになるでしょう。とすれば、希望を見つけるためにこの本を眺めていたとしても、誰が軽蔑できますか。

[5] さて、この小さな本（皆の心を奪うものはないが）は、華やかな空想の書を凌ぐものではありません。

「だが、納得いかない、この書は念入りに調べられても格別の欠点が見当たらないとは。」「では、どこが悪いのでしょうか。」「分かりづらい。」「それが問題でしょうか。」「しかも、作り話だ。」

ある人はこの分かり難い本を、見せかけの態度により、褒めて下さいました。「でも、威厳がない。」お願いします、本心を言って下さい。「弱者を溺れさせる、比喩は盲目にする。」と。

威厳は、世の人の為、聖なることを書く人のペンに誠にふさわしいと思います。しかし、比喩をもって語ることは常に威厳を欠くことになるのでしょうか。神の律法、福音の掟は、昔、事象と、影と、比喩をもって述べられたではありませんか。謹厳な者は、至上の知恵がある者と見られることを恐れて、非を見つけることを好みませんでした。いや、それどころか彼らは身がかがめ、輪留め、輪、子牛と羊、牡牛、牡山羊、苦菜、また子羊の血によって神の御言葉の御旨を知らせたのです。※2 幸いなのは、その中に御光と御恵みを見つけ出す者です。

[6] それ故に、どうか威厳を欠くことについて早まった結論を出すことを避けて下さい。※

威厳があると見えるものがみなそうではないし、例え話もみながみな無益なわけではありません。間違った教えをたやすく受け入れて、真理から離れることのないためです。

比喩はただ真理を秘めています。まるで、桐箱が黄金を秘めているように。

予言者は、比喩によっていつも真理を述べているでしょう。イエスキリストと使徒を見るならば、それは明らかでしょう。このような外装の中に真理があることを。文、言葉において全てに勝る聖書には、至る所に比喩が用いられているのをご存知でないのですか。そのように、我らのこの分かり難いものを有効に用いて下さるかの光、かの光明は湧き出ることでしょう。

[7] さあ、私を批判する方、あなたの一生を見せて下さい。この本にある箇所よりも分かり難い表現がいくつあるかを教えて下さい。あなたの本に、いくつ曖昧な箇所があるかを。公平な人々の前に立つならば、しるがねの宮※3に納めたその虚偽よりも、意味を遥かに悟りやすい箇所が、

彼の本に一箇所に対し、私の本には十箇所はあるのではないですか。

私は知っています。産着の中にあろうとも、真理に基づいて判断し、心を正し、理解を喜び、意思を従え、心を楽しませるもので記憶を満たし、悪い思いを鎮めることは常にすべきです。

また、私は知っています。テモテははっきりと、俗悪な無駄話から避けなさいと言っていることを※4。

真面目なパウロでさえも、比喩を用いることを禁止してはおりません。その中に、心して掘る値打ちのある黄金、真珠、宝石が隠されているからでしょう。

もう一言、述べさせて下さい。ああ、愛しの我がイエスキリスト様、もし御心に叶っていないならば、又はより違う表現で表すこと、もっと深い説明を望んでいるのであれば、それをお示し下さい。

さて、最後にどうか以下の三つの事柄について、述べさせて下さい。それでは、あとは目上の方々に任せるとしましょう。

[8] 一、私はこの構想を用いることを否定されているとは思えません。そして、言葉を用いて読み手を混乱させるために書いたのではありません。さらに、象徴、例えを軽卒に用いることなく、ただ真理を伝えるために用いたいと思います。（私が許されていることの証拠として、今の世に生きている誰よりも神の御心にかなった人の書いた書物があります）このように、私の意見を述べ、ここに声高らかに宣言します。

二、私は知っています。とある（木のように背が高い）人々是对話形式で本を書いているが、それを軽んじる人は誰もいません。もし、彼らが真実を曲げているのであれば、彼らとそのペンは呪われるべきです。真理には神の御心の通りに、私達に入り込む自由があるからです。耕作を初めに教えた人よりも知識を持つ方がいます※5、それはその意のままに私達の思いとペンとを動かすことができる方です。その方は卑しい者を用い、聖なることを成し遂げられるのです。

三、私は知っています。聖書にはいくつもの私の構想と似た箇所があります。それは、一つの事柄に、複数の意味があることです。私はこれを掘っていき、真理の黄金の輝きを消さないばかりか、これを明かりの元に照り出したいと考えています。

さて、このペンを収める前に、この本の益を示した上で、その後は強き者を倒し、弱き者を立たせる「御手」に委ねることにしましょう。

この本は示してくれることでしょう。永遠の報酬を求める人の、来るところ、行くところ、やり残したこと、やり遂げるべきことを。また、走り、走り、その末に栄光の門にたどり着くことを。

[9] また、永遠の冠を得るかのように懸命に旅に出たが、その労力は無駄になり、愚者のごとく死ぬ理由を。

この本は貴方を一人の旅人にするでしょう。もしこの教訓を会得するなら、それは貴方を聖なる国に導くでしょう。そう、それは怠け者の目を覚ませ、盲人にも喜びのあふれるものを見せるのです。

珍しく、益のあることを求め、例えの中の真理を見たと思ったならば、それを覚えていて下さい。年始から年末までに至る月日を覚えていますか。なら、この物語を読んで下さい。いがのようにとどまり、幸のない者を慰めるでしょう。心がかたくなな者も揺り動かされるような言葉

で書いてあります。

目新しいものではありませんが、福音の本質は堅く守っており、それ以外は何も含んではおりません。

もし、憂鬱から解放されたいなら、愚かなことから離れたいなら、なぜなぞとその解答を知りたいなら、黙想に耽りたいなら、肉をつつきたいなら、又は雲の中の人と会い、そのおっしゃることを聞きたいなら、夢に入り込みたいなら、同時に笑い、泣きたいなら、危険なく自らに教えたいなら、本当の自分を知りたいなら、新しい知識を得たいのなら、自分が恵まれているか否かを知りたいなら、

ああ、ならば、ここに来てください。そして、この本と皆の心をを一つにして欲しいと望みます。

ジョン・バニヤン

#### 訳者注

※1 バニヤンは当時、「天の走卒」「The Heavenly Footman」という本を書いていた。

※2 出エジプト記12:7-8,26:5,29:15-32、レビ記14:4-39,16:3,14-15、ヘブル人9:13参照

※3 使徒の働き19:24参照

※4 1テモテ6:20参照

※5 イザヤ書28:24,26参照

## 前編

[10] この世の荒野を歩いている時、とある穴窟のあるところにさしかかり、そこに横になって眠った。眠っているうちに夢を見た。その夢の中で、見ると、ぼろぼろの服を着た一人の男が、顔をその家からそむけ、手に一巻の書物を持ち、大きな荷物を背負って、とある場所に立っていた（イザヤ書64:6、ルカの福音書14:33、詩編38:4、ヘブル2:2、使徒の働き16:31）。

私は眺めた、彼が書物を開いて、それを読んでいるのを見た。読みながら彼は泣き、かつ嗚咽していた。そしてとうとう堪えられなくなり、悲しげな声で叫び出した。『どうしたらいいだろう。』と言いながら（使徒の働き2:37）。

[11] このような状態でそれから彼は家に帰り、妻や子どもがその苦しんでいる有様を見ないように、出来るだけ長い間自分を抑えていた。でも、その苦しみが加わって来たので、黙っていることが出来なくなった。それで、終いには、その妻と子供たちに心を打ち明け、このように語り始めた。

ああ。わが愛する妻よ。と彼は言った。また私の身を分けた子どもよ、君達の一番の友であるこの私は、私の上にしっかりと横たわる重荷のせいで自ら破滅に陥っている。その上、この私達の町は天火で焼かれその恐しい瓦解の中で、君達と共に。何か逃れる道（それが私にはまだ分らないのだ）を見出すことが出来て、それで救われるというようなことにでもならなければ、滅び果ててしまうということを確認に教えられている。これを聞いて身内の者はひどく驚いた。彼が言ったことを本当だと思ったからではなく、何か狂気じみた病気がその頭を侵したと思ったからである。それで、夜に迫っていた時でもあったから、眠気がその頭を落ち着かせるかもしれないと思って、早々に床に就かせた。しかしながら、夜は昼と同じように苦しみに満ちたものであった。それで、眠るどころかため息と涙でその夜をあかした。朝になった時、皆の者は気分はどうか、と尋ねた。ますますよくない、と彼は言った。それからまた語り出した。しかし家の者は冷酷になってきた。また、無慈悲な意地の悪い態度をとり、その病気を取り除こうと思った。時には嘲笑った、時には叱りつけた、時には頭から相手にしなかった。そこで、彼はその部屋に閉じこもり、彼らのために祈り、彼等を憐れみ、また自分の哀れな身の上を嘆き始めた。彼はまた、ひとりで野原を歩くのであった、時には読み、時には折りながら。こうしてしばらくの間、このようにして時を過ごした。

[12] さて、ある時のこと、彼が野原を歩きながら、いつもの習慣であったように、その書物を読み、心の中で大変に苦しんでいるのを見た。読んでいるうちにも彼は前のように泣き出した、「救われるために、私はどうしたらいいのだろうか」と叫びながら（使徒の働き16:30,31）。

[13] 私はまた、彼が走ろうとするかのように、あちこちを眺めているのを見た。しかし、じっと立っていた、というのは私が気付いたように、どちらへ行けばよいか分からなかったのである。その時、眺めていると、その名をエバンジェリスト（注：福音伝道者）という人が彼のところ

へやって来るのを見た。その人は彼に訪ねた、何故あなたは泣いているのですか（ヨブ記33:23）。

[14] 彼は答えた、私はこの手にある書物によって死の宣言を受けていること、又、その後に審判を受けに行かなければならないこと（ヘブル9:27）が分かったのですが、前者は嫌だし（ヨブ記16:21）、後者は耐えられないと思うのです（エゼキエル書22:14）。

[15] すると、エバンジェリストは言った。この世にはこれほど多くの災いがつきまとっているのに、どうして死ぬことを好まれないのですか。彼は答えた。何故なら、背中に背負っているこの荷物が私を墓よりも低く沈め、地獄に落ちるだろうと心配しているからです（イザヤ書30:33）。それに、私が牢屋へ行く用意さえ出来ていないのに、審判を受け、そこから刑罰を受けに行く用意などはなおさら出来ていません。こんなことを思って泣いているのです。

[16] すると、エバンジェリストは言った、そういう事なら何故じっと立っておられるのですか。彼は答えた。どちらへ行けばよいのか分からないからです。すると、彼は羊皮紙の巻物を渡した。その中には「来るべき怒りより逃れよ。」と書いてあった（マタイの福音書3:7）。

[17] それで、彼はそれを読み、それからエバンジェリストの顔を注意深く眺めながら、どこへ逃れるべきでしょうかと言った。その時、エバンジェリストは広大な野原を指さしながら言った。向こうの狭いくぐり門が見えますか。男は言った、いいえ（マタイの福音書7:13,14）。するとエバンジェリストは言った、それなら輝やく光は見えますか（詩編119:105、Ⅱペテロ1:19）。彼は言った、どうやら見えるように思います。するとエバンジェリストは言った、あの光から目を離さないようにして、あそこまでまっすぐに進んで下さい。そうすると門が見えるでしょう、その門を叩けば、どうすればよいのかということが分かります。

[18] そこで、私は夢の中で彼の走り出すのを見た。さて、その家からまだ遠くは走っていないころ、妻と子どもはその後から戻れ！と叫び出した。しかし、彼は指を耳に突っ込んで走り続けた。命、命、永遠の命！と叫びながら（ルカの福音書14:26）。こうして後を振り返らず、大野原の真ん中へ向って逃げ延びた（創世記19:17）。

[19] 近所の人々もその走るのを見るために出て来た（エレミア記20:10）。彼が走っている時、ある者は嘲り、ある者は脅し、またある者は彼の後から戻れ！と叫んだ。その中に力づくで連れて帰ろうとした二人の者があった。その一人の名はオブスティニット（注：強情な者）で、今一人の名はプライアブル（注：優柔な者）であった。この頃には彼もかなり遠く離れたところに達していた。しかしながら、二人はあとを追うと決心していたので、やがて彼に追いついた。すると彼が言った、御近所の方々、何のために来られたのですか。彼らは言った、あなたを説得して私達と一緒に帰ってもらうために。しかし彼は言った。それは断じて出来ませんよ。あなた方は、滅亡の町に住んでおられる。そこは私の生まれたところでもあります、私にはいずれそうなることが分かっています。それで、遅かれ早かれ、そこで死んで、あなた方は墓よりも低く沈み、火と硫黄の燃えている地獄へ行かれるでしょう。ですから、あなた方もむしろ私と一緒に行きましょう。

[20] オブス 何ですって、どうして友人や快適さを捨てて行くのですか。

クリス そうです、クリスチャンが言った。（というのは、これがその男の名であった。）何故なら、あなた方の捨てた全てのものでも、私が授かろうと思っているもののほんの少しにも比べるほどの価値がないからです（Ⅱコリント4:18）。もしあなた方が私と一緒に来て、それを手に入れられたならば、私と同じように暮らして行けるのです。何故なら、私の行くところには十分でありあまる程の物があります（ルカの福音書15:17）。さあ、一緒に行きましょう。だまされたと思ってついてきて下さい。

[21] オブス 世界のすべてのものを棄てても欲しいという、そのあなたの求めているのは一体何ですか。

クリス 私は朽ちず、汚れず、また廃れていくこともない遺産（Ⅰペテロ1:4）を求めるのです、それは天に貯められています。そこは素晴らしいところであり（ヘブル11:16）、また定められた時に、熱心にそれを求めた者に与えられることになっています。お望みなら、私の書物の中にそう書いてあるのを読んで下さい。

オブス ちっ！書物なんかどうでも良いのです。私達と一緒に帰るのですか。帰らないのですか。

クリス いや、私は戻りません。手を鋤に置いたのですから（ルカの福音書9:62）。

[22] オブス そうですか、ではプライアブルさん、この人はほっておいて引返しましょう。世の中には頭の狂った人がおり、何かふと思いついたことを考えると正常な七人の人間よりも自分のほうが利口であるように見えてしまうものなのですよ。

プライ まあまあ、そう悪態をつかないで。クリスチャンさんの言はれることが本当なら、この人の求めるものは私達のものより上です。私もこの方と一緒にいきたくなりました。

オブス 何ですって！まだこの上に愚かな人が出て来るのですか。私の言うことを聞いて帰りましょう。こんな気の狂った人があなたをどこへ連れて行くか分かるものですか。さあ帰りましょう。

[23] クリス いや、プライアブルさん、私と一緒にいらっしゃい。私の言ったようなものは手に入りますし、そのほかにもたくさんの立派なものが手に入ります。私を信じないのならないのなら、この書物のこのところを読んで下さい。そこに言い表わしてあることの真実性は、明らかでしょう。それを言い表わした人の血で確めてありますから（ヘブル9:17-21,13:20,21）。

プライ それじゃあ、オブスティニットさん。ようやく事態がはっきりしてきました。私はこの方と一緒にいきます。そうして運命を共にします。しかし、お連れの方、あなたはその素晴らしいところへ行く道を知っているのですか。

[24] クリス それはエバンジェリストという名前の方が教えて下さいました、向こうの小さい門へ急ぐようにと。そこへ行けば道についての教えを得ることができるでしょう。

プライ それなら、さあ、ぼちぼち出かけましょうか。

オブス 私は家へ帰ります。こんな血迷った、突拍子もない連中のお供はごめんです。

[25] さて、私は夢の中で、オブスティニットが帰って行った時、クリスチャンとプライアブルは

大野原を越えて話しながら行くのを見た。それから、このように彼らは会話を始めた。

[26] クリス さあ、プライアブルさん、どうですか、気分は。あなたが私と一緒に来て下さって嬉しいです。オプスティニットさんでも、まだ目に見えないものの力と恐しさを私が感じたように感じさえすれば、あのように軽々しく私達に背を向けられなかったと思いますが。

プライ さあ、クリスチャンさん、ここには私達二人のほかに誰もいないのですから。その物というのはどういう物なのか、どうすれば手に入れることが出来るのか。どこへ向って私達は歩いているのか、ということ、今、もう少し詳しく教えて下さい。

[27] 私は舌で喋るよりも心で考える方がいいのですが、しかしまあ、あなたが知りたいとお望みですから、私の書物の中にあることを読んでさしあげましょう。

プライ あなたはその書物の言葉が確かにに本当だと思っているのですか。

クリス はい、本当にそう思っています。何故なら、それは嘘をつくことの出来ない方がお作りになったのですから（テトス1:2）。

プライ うーん、それは一体どういうことですか。

クリス 果しない王国があり、私達はその王国に永遠に住むことが出来るように、永遠の命が与えられます（イザヤ書45:17、ヨハネの福音書10:27-29）

プライ なるほど。それで？

クリス 私達に与えられるための栄光の冠があり、天の青空の太陽のように私達を輝やかせる衣があります（Ⅱテモテ4:8、黙示録3:4、マタイの福音書13:43）。

プライ それは素晴らしい。それで、そのほかには？

クリス そこでは泣くことも悲しみもありません。その場所の所有者であられる方が私達の間から涙を拭いて下さいますから（イザヤ書25:6-8、黙示録7:17、21:4）。

[28] プライ そこではどういう方がいるのですか。

クリス そこでは見る目も眩むばかりのもの、セラフィム（注、熾天使）やチェラビム（注、知天使）と交わることになるでしょう（イザヤ書6:2）。そこでは、私達より先にその場所に行った何千、何万の人々に会うでしょう。その中の誰一人として悪心を抱いている者のない、愛に満ちた、清い人々です。皆、神の指し示す道を歩んでいます。そうして永遠に神の中に受け入れられています。（Ⅰテサロニケ4:16-17、黙示録5:11）一言で言えば、そこに私達は黄金の冠をつけた長老達を見るでしょう（黙示録4:4）。そこに黄金の豎琴をもった聖なる乙女を見るでしょう（黙示録14:1-5）。そこに私達は、その場所の主のお方に対して抱いていた愛の故に、この世では断絶され、炎の中に焼かれ、獣に食われ、海で溺れた人々がことごとく健康で不滅の生命を衣のように纏っているのを見るでしょう（ヨハネの福音書12:25、Ⅱコリント5:2-4）。

プライ それだけでも心を奪われます。でも、そういうものが本当に頂けるのでしょうか。どうすれば私達はそれを頂く者になれますか。

クリス その国の統治者であられる主の君はこの書物の中にそのことを書き記されました。私達が真心からそれを欲しいと望めば惜しげもなく与えて下さるのです（イザヤ書55:1-2、ヨハネの福音書6:37,7:37、黙示録21:6,22:17）。

プライ いや、なるほど。お連れの方、私はそういうことを教えて頂いて嬉しいです。さあ、

すこし歩調を早めましょう。

クリス 私は背中に背負っているこの荷物のために、思うように早く歩けないのです。

[29] さて、私は夢の中で、この話が終わったちょうどその時、二人が大野原の真ん中にある、とてもぬかるみの深い泥沼のそばに近づいているのを見た。二人は気を奪られていたので、彼らはたちまちその沼の中に落ちた。この泥沼の名は「落胆」であった。それで、ここにしばらくの間、彼らはのたうちまわり、ひどく泥まみれになった。クリスチャンは背中に背負っている荷物のためにぬかるみの中に沈み始めた。

[30] するとプライアブルが言った。ああクリスチャンさん。あなたは今どこにいるのですか。

クリス いや全く、私にも分かりません。

これを聞いてプライアブルは怒りだした。それからとげとげしい声でその連れに言った。

プライ これまでずっとあなたが私にお話しになった幸福というのはこれですか。出発の最初でこんな不幸に出会うのなら、これからの旅路ではどんなにひどいことが待ち受けていることでしょう。もし一命を取り留めてこの沼から出ることが出来たなら、あなたは私にお構いなく一人でその結構な国をお持ちになったらよろしいですよ。

こう言って、一あがき二あがき、あがき回った上、その家の方に最も近い岸の上へ沼から這い上がった。そこで、彼はさっさと帰ってしまった。そうしてクリスチャンはそれ以上彼を見なかった。

[31] こういうわけで、クリスチャン一人とり残されて「落胆の泥沼」に転げ回っていた。それでもなお、彼はその家から更に遠く潜り門の方に最も近い泥沼の岸へ向ってあがき行こうとした。で、そこへ行くには行ったが、背中に背負っている荷物のために這い出すことが出来なかった。しかしながら、夢の中で眺めていると、ヘルプ（注：救済者）という名の一人の男が彼のところへやって来て、そこで何をしていますのですか、と尋ねた。

クリス 私はね、エバンジェジストという方にこの道を行けと言われたのですよ。その方は、来るべき怒から逃れるために、向こうの門へ行くようにと教えて下さいました。で、そちらへ向って歩いているうちに、ここへ落ち込んだのです。

[32] ヘルプ でも、どうして踏石（注：神の約束）を探されなかったのですか？

クリス 恐怖が大変な勢いで迫ってきたので、あわてふためいて気がつきませんでした。

ヘルプ では、手をおかさない。

そこで彼は手を出した。ヘルプは彼を引き出した。そうして、しっかりした地面に彼を置いた。それからその道を進んで行きなさい、と告げた（詩編40:2）。

[33] その時、私は彼を引きずり出した人のところへ歩み寄って言った。もし、この場所を経て「滅亡の町」から向こうの門へ行く道があるというのなら、何故、この土地が補修されて、あの哀れな旅人がもっと安全にあちらへ行くことが出来るようになっていないのでしょうか。すると、彼は私に言った。このぬかるみの深い泥沼は修理することの出来ないようなところなのです。罪の確認に伴う汚物等が絶えず流れ込む落ち込んだ場所なので、「落胆の泥沼」と呼ばれています。というのは、いつでも罪人が目をさまして、その滅び果てた状態に気がつきますと、その心の中にたくさんの恐怖や疑惑や、氣力を失わせる懸念がこみ上げて来て、そのすべてが集まってはこの場所に溜まります。これがこの土地が悪い理由なのです。

[34] この場所がこのように悪くなっているのは王のお望みの状態ではないのです（イザヤ書35:3,5）。陛下の部下は測量師の指図のもとに、何とかして修理が出来ないものかと、過去千六百年以上もこの小さな地面の仕事に従事していました。そののみか、私の知っているところでは、と彼は言った。少なくとも二万トン以上の荷車に積んだ荷物、そう、あらゆる時期に王様の領国のすべての場所から持って来た健全な教訓の数百万というものがここに飲み込まれました。し

かも、彼ら自身がそれらのものはこの場所をよい地面にするための最善の資材であると言っています。もしそうなら修理されているはずですが、ご覧の通りまだ良い地面にはなっていません。ですから「落胆の泥沼」なのです。またもし人々が出来るかぎりのことをしたとしても変わらないと思います。

[35] もっとも、立法者の命令で、しっかりした頑丈な踏石が泥沼の真ん中にすら設けられています。しかし気候の変わり目などによくあるように、この場所がその汚物を吐き出すような時には、これらの踏石が殆んど見えません。たとえ見えたとしても、人々は頭がふらふらしているために足を踏み外します。すると、そこに踏石があったところで、結局、泥まみれになります。でも、ひとたび門から入って行けば地面はよくなります（1サミュエル12:23）。

[36] さて、私は夢の中で、この頃にはプライアブルがその家に辿り着き、その結果この人々が彼を訪ねて来たのを見た。そのうちのある者は立ち返って来たことに対して彼を利口な人であると言い、ある者はクリスチャンと一緒に無闇なことをしたのに対して愚かな人であると言った。また、ある者は彼の卑怯をあざ笑った。そりゃもう、思い切ってやり出したのだから、多少の困難のために諦めるような情けない真似はごめんだ、と言いながら。それで、プライアブルは彼らの間に肩身狭そうに座っていた。でも、そのうちに大分気が強くなった。そこで彼等は話題を変えて、クリスチャンを可哀相な者だと嘲笑い、陰口を始めた。

プライアブルの話はこれだけである。

[37] さて、クリスチャンがひとりさびしく歩いていた時、遠く離れたところにいる一人の人が野原をよこぎって近寄って来るのを見つけた。と言うのは、二人は偶然、ちょうどすれ違うように歩いていたからである。この紳士の名はミスター、ワールドリーワイズマン（注：世智聡明）であった。彼は極めて大きな肩をもち、クリスチャンの来た町のすぐ側にある「現世的深謀」という町に住んでいた。そこで、この人は、クリスチャンに出会い、また薄々彼のことを知っていたので、というのは、クリスチャンが「滅亡の町」から出かけたということは彼が住んでいた町でかなりの噂に上っていたのみならず、他の町でも話題になり始めていており、その苦しんで行くのを見たり、そのため息や嘆き、その他のこれに似たようなことを見ることで、これが例の男だなど、多少心あたりをつけた上、このようにクリスチャンとのちょっとした話を始めた。

[38] ワイズマン やあ、あなたは一体どうされたのですか、その重苦しい様子で、どこへ行かれるのですか。

クリス 重苦しいようすと言えば、実際哀れな人間がこのような様子をした者もあまりいないでしょう。どこへ行くかとのことについては、向こうの潜り門へ向かっています。あそこで、私の重い荷物からまぬがれるための道につくことが出来ると教わっておりますので。

ワイズマン 奥様やお子様がおありですか。

クリス はい、おります。しかし、私はこの重荷を負わされているので、前のように妻子を楽しむことが出来ないのです。今では妻子などはない者のように思います（1コリント7:29）。

ワイズマン 私が助言をしたら聞いて頂けますか。

クリス 良いご意見であれば聞きたいと思います。その必要に迫られておりますので。

[39] ワイズマン では、お勧めしたいと思うことは、さっさとあなたの荷物をそこらに捨てられ

たらよいでしょう。それではとても心が落ち着きませんよ。また、それまでは神があなたに下さった御恵みの利益を受けることも出来ませんよ。

クリス それが私の求めていることなのです。この重い荷物を永久に捨ててしまうことが。でも、これを自分で捨てることは私には出来ません。また、この国にはそれを私の肩からとりのけて下さるような人もいないのです。それで、私はこの道を歩いているのです、私の荷物から免れるために。

ワイズマン あなたの荷物から免れるために、この道を行けと命じたのは誰ですか。

クリス 大変偉大な、立派なように思われた方です。名前は、私の覚えているところでは、エバンジェリストです。

[40] ワイズマン　そういうことを勧めるのは怪しいですね。世の中にはその男があなたに教えた道より危険な、困難な道はありませんよ。あなたがその男の勧めに従われたならば、分かるでしょう。既にお見受けするように、あなたは何かに出会った。「落胆の泥沼」の汚れがあなたについているではありませんか。しかし、あの泥沼はその道を行く者にふりかかる災いの始まりです。私の言うことをお聞きなさい。私はあなたよりも年をとっているのだから。あなたはあなたの行かれる道で、多分、疲労、苦痛、飢え、不安、裸、剣、獅子、悪龍、闇、それから一言で言えば、死と、その他あらゆるものに出会うでしょう。これらのことは本当です。たくさんの証言によって確められているのですから。それに、どうしてまた、一人の人間が見ず知らずの人の言うことを聞いて、そう無闇にその身を捨ててしまうのですか。

クリス　それは、この私の背中に背負っている重荷があなたのおっしゃったすべての困難よりも恐しいからです。それどころか、そういう目に遭っても、私の荷物からの救いに会えば、途中の困難位は何でもないと思います。

[41] ワイズマン　はじめ、どういう風にしてその荷物を背負う羽目になったのですか。

クリス　私の手にあるこの書物を読むことによってです。

ワイズマン　そうだろうと思いました。あなたの身に起ったことは他の弱い人に起ったこととおなじです。そういう人たちは身分不相当に高尚なことに手を出して、たちまちあなたのような心境に陥るのです。この心境は、今のあなたのように人間の氣力を奪うばかりでなく、自分でも分からないものを得るための軽卒な行動をさせます。

クリス　私には自分に必要なものが分かっています。私の重い荷物を下ろして楽になることです。

[42] ワイズマン　でも、どうしてあなたはこの道を通って楽になろうとするのですか、それにはこんなに多くの危険が件っているのに。それに、もしあなたが辛抱して私の言うことを聞かれるなら、この道を通ってあなたが出会うであろう危険もなしに、願っていることを得られるようにして差し上げることが出来ますから。そうでなくとも、療法は手近なところにあります。それに、付け加えますが、ああいう危険の代わりに、あなたはたくさんの安全と友情と、満足に迎えられることでしょう。

クリス　どうかその秘密を私にあかして下さい。

[43] ワイズマン　それは、向こうの「道徳」という名の村に、リーガリティ（注：説法）という名前の人が住んでおられます。とても筋の通った人で、また大変評判も良く、手を貸して、あなたの持っているような荷物を人々の肩から取り除くことが上手です。もちろん、私の知っているところでも、その方面で大分善い行いを積まれました。それに、その荷物のせいで多少気の狂った者を治療するのがうまいのです。その方のところへ、私の言ったように訪ねればすぐに助けてもらえるでしょう。その家はここから一マイルにも足りないところにあります。それに、もしその人が不在でも、シビリティ（注：礼儀）という美しい青年の息子がおり、彼もそのご老人とおなじように、それを行うことが出来ます。そこで、あなたの荷物から楽にしてもらえと思えます。それで、もし、あなたがもとの家へ帰るつもりがないなら、まあ実際私もお帰りになるこ

とを望みませんが、あなたは奥様やお子様達をこの村へ呼び寄せることができます。そこには今空家になっている家があり、その一つを安い家賃で借りることができます。食物も安く、品質もいいですよ。それと、あなたの生活をそれ以上幸せにするものがあり、それはご近所の方々に信用されて、立派に暮らして行くことです。

[44] 今やクリスチャンは少し途方にくれた。が、やがて、彼は決めてしまった。この紳士の言ったことが本当だとすれば、私の最も利口な道は、彼の忠告に従うことである、と。そこで、更にこう言った。

[45] クリス その頼もしい方のお家へ行く道はどちらですか。

ワイズマン 向こうの高い丘が見えますか。

クリス ええ、とてもよく見えます。

ワイズマン あの丘にそって歩いて行って下さい。すると、はじめに辿りついた家がその方のお家です。

[46] そこで、クリスチャンはその道から逸れて、助けを求めるために、ミスター・リーガリティの家に向った。けれども、どうしたことが、彼が今や丘のすぐ側に着いた時、それは非常に高く、道の方に接近していたその山腹はぐっと上からのしかかって来たので、クリスチャンは丘が頭の上に落ちて来ないかと思って、それ以上進むことが恐しくなった。で、彼は立ちすくみ、どうしたらよいか分からなくなった。

それにまた、荷物は彼がこの道を歩いていた間に重くなったように感じた。そこへ、丘からはぱっと火の閃光が飛んできて、彼は焼かれるのではないかと心配した（出エジプト記19:16,18）。このようなことがあり、ここで彼は汗を流し、恐怖の為に怖じけてしまった（ヘブル12:21）。

[47] それで、今や彼はミスター・ワールドリィ・ワイズマンの意見に従ってしまったことを後悔し始めた。それと同時に、エバンジェリストが近づいてくるのを見た。その姿を見るとともに、恥ずかしさのあまり顔が赤くなった。さて、エバンジェリストは次第に彼のもとに近寄ってきた。彼の元にたどり着くと、厳格な、恐ろしい顔で彼を眺め、クリスチャンに語りだした。

[48] ここで何をしていますのですか、クリスチャン、と彼は言った。その言葉に対して、クリスチャンは何と答えていいか分からなかった。そこで仕方なく言葉もなく立っていた。すると、エバンジェリストは更に進んで言った。あなたは「滅亡の町」の城壁の外で泣いていた人ではありませんか。

クリス はい、私がその男です。

エバン 私はあなたに小さな潜り門へ行く道を教えませんでしたか。

クリス はい、教えて頂きました。

エバン それならば、こんなに早く道を外れてしまったのはなぜですか。

[49] クリス「落胆の泥沼」を乗り越えると間もなく一人の紳士に会ったのです。その人が、この前にある村に私の荷物をとり除いて下さる人を見つけることができるということをおっしゃったのです。

エバン それはどんな人でしたか。

クリス 紳士のように、いろいろ話をして下さり、とうとう私は説得させられてしまいました

。そこで、ここへ来たのです。ですがこの丘と、それが道の上にのしかかっているのを見た時に、頭の上に落ちてくるのではないかと思って、急に心配になって立ちすくみました。

エバン その紳士はどんなことを言いましたか。

[50] クリス はい、どこ行くのかと尋ねました。それで、私は答えました。

エバン 次に、どんなことを言いましたか。

クリス 私に家族があるかと尋ねました。それで私は答えました。でも、私はこんなに荷物を背負わされているので、前のように彼らと楽しむことが出来ないのです、とも付け加えました。

エバン すると、相手はなんとと言いましたか。

クリス 今すぐ私の荷物を捨てなさい、と告げました。それで、私は求めているのは楽になることだと言いました。だから、私はどうすれば救いの場所に辿りつくことが出来るかということについて、この上の教えを受けるために、あの向こうの門へ行くところです、とも言いました。もっと近道で、あなたが最初に通ろうとしていた道のように困難を伴わない、よりよい道を教えてあげましょう、その道は、そういう荷物をとり除くことが得意な人の家に導くでしょう、と。それで、私は彼を信じました。そうしてあの道から逸れてこの道に辿りつきました。もしかしたら、もっと早く私の荷物から解放されるかもしれないと思ひまして。しかし、この場所へ来た時、起こった事態を見た時、危険を恐れて立ち止まりました。それで今は、どうしたらいいのか分かりません。

[51] エバン それでは、しばらくじっと立っていて下さい。神の御言葉をお見せしましょう。そこで、彼は震えながら立ち上がった。すると、エバングェリストは言った。『語っておられる方を拒まないように注意しなさい。なぜなら、地上においても、警告を与えた方を拒んだ彼らが処罰を免れることができなかつたとすれば、まして天から語っておられる方に背を向ける私たちが、処罰を免れることができないのは当然ではありませんか。』（ヘブル書12:25新改訳）。彼は重ねて言った。『わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのところは彼を喜ばない。』（ヘブル10:38新改訳）。彼はこれらの言葉をこのようににあてはめて言った。あなたはこの哀れな状態に走り込もうとしています。あなたは最上の勧めを退け、平安の道から足を引いたので、あなたに滅亡の危険が迫っています。

[52] すると、クリスチャンは死んだようになってその足もとにひれ伏した。なんてことだ、私はもうおしまいです、と叫びながら。その様子を見て、エバングェリストはこのように言いながら彼の右手を取った。『人はどんな罪も冒瀆も赦していただけます。』（マタイの福音書12:31新改訳、マルコの福音書3:28）『信じない者にならないで、信じる者になりなさい。』（ヨハネの福音書20:27新改訳）と。すると、クリスチャンは再び生気を回復した。そうして怯えながら立ち上がった。

[53] エバングェリストは更に言った。これから話すことをよく聞いて下さい。今、あなたを欺いたのは何者であるか、またあなたを誰のもとに送ろうとしたのかを説明します。あなたに近づいた男はワールドリィ・ワイズマンという者で、そう呼ばれるのも分かります。なぜなら、彼はこの世の教理を好み、（1ヨハネ4:5）、（だから、彼はいつも道德という町の教会に行くのです）その教理何よりも愛するのは、それが彼を十字架から救ってくれるからです（ガラテヤ6:12）。そうして彼がこういう現世的な気質をもっているために、正しいものであるにも関わらず、私の道を妨げようとするのです。さて、この男の意見の中であなたが忌み嫌わなければならないこ

とが三つあります。

一、彼があなたを正しい道から誘い出したこと。二、彼があなたに十字架を嫌わせるように仕向けたこと。三、彼があなたの足を死へと導くあの道へ向けさせたこと。

[54] 第一に、あなたは彼があなたを正しい道から誘い出したこと、またあなたがそれに同意したことを嫌わなければなりません。これはワールドリィ・ワイズマンなる者の意見のために神の意見を退けることになるからです。主はおっしゃいました、『努力して狭い門から入りなさい。』（ルカの福音書13:24）『いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。』（マタイの福音書7:14新改訳）。この小さな潜り門、それに向かうこの道から、あの悪い男があなたを外れさせ、破滅に陥らせようとしたのです。ですから、彼があなたを道から誘い出したことを憎み、彼に耳を貸したあなた自身を憎むべきなのです。

[55] 第二に、彼があなたに十字架を嫌わせるように仕向けたことを、嫌わなくてはなりません。なぜなら、あなたはそれを「エジプトの宝」よりも先に選ばなければならないからです（ヘブル11:25-26）。しかも、「栄えの王」はあなたに告げて、『いのちを救おうと思う者はそれを失う』（マルコの福音書8:35新改訳、ヨハネの福音書12:25、マタイの福音書10:39）と仰せられました。また、『わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません』と。つまり、それなくしては永遠の命を得ることができない、と「真理」が言ったのに、それはあなたの死であると説得しようとする男に対して、この教理を忌み嫌うべきです。

[56] 第三に、彼があなたの足を死の道へ導いたことを憎むべきです。また、これについては、彼があなたを何者の元に送ったのか、その人間が荷物からあなたを救うことについていかに無力かということも考える必要があります。

[57] あなたが楽になるために送られた男とは、その名をリーガリティイといって、女奴隷の息子です。その女は今もなお子供達と共に囚われの身であり（ガラテヤ4:21-27）、霊妙な教義により、あなたが頭の上に落ちてくるのではないかと心配したこのシナイ山なのです。この女が子供達と共に囚われの身であるなら、どうしてあなたが彼らのおかげで自由になることができますか。よって、このリーガリティイはあなたを荷物から解放することができないのです。現に、あの男によって荷物から免れた人はいません。これからも出てこないでしょう。なぜなら、律法によってでは生きているいかなる人もその荷物から免れることができないからです。ですから、ミスター・ワールドリィ・ワイズマンは異邦人で、ミスター・リーガリティイは詐欺師です。その息子であるシビリティイに至っては、どんなにその作り笑いをしたところで、一人の偽善者であるのにすぎず、あなたを助けることなんか到底無理です。本当ですよ、こういうものについてあなたのお聞きになったことの一切は、私があなたを出発させた道を外させて、あなたの救いからあなたを誘惑しようとする一つの企みでしかないのです。こう言った後、エバンジェリストは彼の言ったことの確証を求めて声高らかに天に呼びかけた。すると、それと共に哀れなクリスチャンが立っていた山から、言葉と火とが現われて、それが彼の身の毛をよだたせた。その言葉はこのように宣言された。『律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでも

みな、のろわれる。』』（ガラテア3:10新改訳）。

[58] 今やクリスチャンは死のほかには何も待ち受けていないのを知り、悲しげに泣き出した。ミスター、ワールドリィ・ワイズマンと出会った時さえ呪いながら。その意見に耳を借したのはわれながら馬鹿も馬鹿、大馬鹿者だったと、いつまでも言い続けながら。彼はまた、現世的なものから流れ出た、あの紳士の議論が彼を説得して正しい道を捨てるようにさせたということを考えて大いに恥じた。この上で、彼は次のような言葉で再びエバンジェリストに尋ねた。

[59] クリスチャン どうですか、まだ望みがありますか。これでも立ち返って潜り門へ登って行くことができますか。このことのために見捨てられないことはありますか、この恥から離れることはできますか。私はあの人の意見に耳を借したことを悔んでいます、でももう私の罪は赦されないのでしょうか。

エヴァンジェリスト あなたの罪は極めて大きなものです。何故なら、あなたはそれによって二つの悪を犯したから。あなたは禁じられた道に踏み込むため善い道を捨てた。しかし門を守る人はあなたを受け入れるでしょう、彼は人々に対して好意をもっていますから。ただし、再び道を外さないように気を付けるのですよ。『御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。』（詩篇2:12新改訳）。そこで、クリスチャンは立ち返ることにとりかかった。エバンジェリストは彼に接吻した後に微笑み、道中の安全を祈った。それから彼は急いで歩き続けた。途中誰とも喋らず、また誰に物を尋ねられても答えなかった。彼はこの間、禁じられた土地を踏んでいる人のようであり、ミスター・ワールドリィ・ワイズマンの意見に従って捨ててしまった元の道に再び到達するまでは決して自ら安全なものであるとは思わなかった。こうして、時が経つうちにクリスチャンは門に辿り着いた。すると、その門の上には『だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。』（マタイの福音書7:8）と書いてあった。

[60] 「内に入ることを望む者は、まず外に立ち、門を叩くべき。また、入る為には叩く者を審査を受ける必要もない。神が彼を愛し、許されるから。」

彼はそこで、一度ならず、二度ならず、何度も叩いた（マタイの福音書7:7）。

「私は今ここに入れるだろうか、値うちがない謀反者であり、哀しい自分ではあるが、内の人

は門を開いて下さるだろう。ならば必ず、その永遠の賛美を高く歌おう。」と、言いながら。

最後にグッドウィル（注：親切）という名のおごそかな人が門へ来て尋ねた。どなたですか。どこから来たのですか。ご用は何ですか。

[61] クリス 私は哀れな重荷を負った罪人です。「滅亡の町」から来ましたが、来るべき怒りから救われるためにシオンの山へ行くところです。このようなわけで、この門を通してそこへ行く

と良いことを教わったので、私を入れて下さいますか、と申し上げたいのです。

心から、喜んで、お入りなさい、とグッドウィルは言った。そこで、彼は門を開いた。

[62] で、クリスチャンがまさに足を踏み入れようとする時、相手はぐいと彼を引き寄せた。すると、クリスチャンが言った。え、どうしたのですか。相手は彼に告げた。この門からすこし離れたところに堅固な城が建ってしまして、ベルゼブル（注：悪魔）が城主です。そこから、彼も、また彼と共にいる者も、この門にたどり着く人々に矢を放ってくるので、入る前に死なないためです。

すると、クリスチャンが言った。この門に入ったことは、もちろん嬉しかったのですが、それを聞いて恐れも感じます。こうして彼が中に入った時、門の人は誰がここへ来る道を教えたのかと尋ねた。

[63] クリス エバンジェリストがここに来て（私が前に言ったように）門を叩くように、と言われたのです。それから彼は、あなたが私のすべきことを教えて下さるとも言われました。

グッド 開かれた扉があなたの前に置かれてあります。誰もそれを閉ざすことはできません（黙示録3:8）。

クリス これでやっとこの旅の目的が達成できます。

グッド ですが、なぜお一人で来られたのですか。

クリス 近所の人達は誰も、私が自分の危険を悟ったように、彼ら自身の危険を悟らなかったのです。

グッド あなたがここにおいでになることを知っていた人がいますか。

クリス はい、妻と子供が最初に私を見つけまして、帰って来いと後ろから呼びかけました。近所の人々も帰って来いと叫びながら、呼びながら、立っていました。が、私は指を耳に突っ込み、ここまでやってきました。

グッド しかし、その中にあなたを追ってきて立ち返るように勧めた人はいなかったのですか。

クリス いました。オブスティニットとプライアブルの二人です。けれども、私を説得することができないとわかった時、オブスティニットはあざ笑いながら帰っていき、プライアブルは私と少し一緒に来ました。

グッド その人はどうしてあなたと一緒にここまで来なかったのですか。

[64] クリス 現に、「落胆の泥沼」に着くまでは一緒だったのですが、私達はあの沼に不注意で落ちてしまいました。すると、近所のプライアブルは落胆して、その先には行く気力がなくなってしまいました。そこで、彼は自分の家の方に近い岸に這い上がり、その素晴らしい国を私に構わず、一人で持つがいいと言い放ちました。こうして、彼は家路につき、私はこの道をやってきたのです。彼はオブスティニットの後を追い、私はこの門に向かって。

グッド ああ、なんと気の毒な人な。天の栄光はそれを得る為のわずかな困難を受けるに足りないと思うほど、その人にとってはわずかな値打ちしかなかったのでしょうか。

[65] クリス 正直、プライアブルのことをありのままに話しましたが、彼と私を比べたら、私も優れたところはないと思います。確かに、彼は家に帰ってしまいました。しかし、私もまた、道を逸れて死の道に踏み込んでしまったのです。ミスター・ワールドリー・ワイズマンという人の世俗的な議論に説得させられまして。

グッド ああ、あの人に会ったのですか。何ですって、あの人がミスター・リーガリティによって楽を求めるようにさせるところであったのですか。あの二人は、大変な詐欺師ですよ。あなたは彼らの意見に従ったのですか。

クリス はい、私のできるところまでは従いました。私はミスター・リーガリティを探しに出かけました。その家の側に立っている山が頭の上に落ちてくるように思えるところまで。そこで、私は止まるしかなかったのです。

グッド あの山は多くの人々の死を生み出し、またこれからも生み出し続けるでしょう。粉々にならなくて良かったですね。

クリス いや、実は、気落ちして考え込んでいるところに、エバンジェリストさんが幸運にも再び私に近づいてきて下さらなければ、その後どうなったのかはわかりません。しかし、今思えば、あの方が私の元に来て下さったのは、神様の憐れみでした。そうでなければ、ここに来ることはできなかったのですから。でも、やっと今着くことができました。私はこういう者なので、実際、このようにあなたと話をしながら立っているよりも、あの山で死んだほうが相応しいことはわかっています。しかし、ああ、これはなんとという恵みでしょう。ここへ入ることを許されたとは！

[66] グッド 私達はどんな人でも断ったりはしません。その人達がここへ来るまでにどんなことをしていたとしても。その人達は、決して退けられないのです（ヨハネの福音書6:37）。ですから、クリスチャンさん、まあこちらにいらっしやい。あなたの行くべき道を教えましょう。前を見て下さい。あの狭い道が見えますか。これがあなたの行くべき道です。これはイスラエルの祖先達、予言者、キリスト、その弟子達によって作られたのです。また、定規で可能な限り、まっすぐに作られています。これがあなたの行くべき道です。

[67] クリス しかし、そこには他に、慣れない者が道に迷うような曲がり角や、うねったところはありませんか。

グッド ありますよ。そこにはたくさんの道があります。それらは歪んでいて、また広いのです。しかし、あなたはこのようにして正しいものと、間違っただけのものを見分けることができます

。正しいものに限ってまっすぐであり、また狭いのです（マタイの福音書7:14）

[68] その時、私は、夢の中でクリスチャンが自分の背中に背負っている荷物を取り除くのを助けてくれませんか、と尋ねているのを見た。彼はまだそれから免れておらず、また人の手を借りなければどうしてもそれを取り除くことができなかつたからである。

[69] グッドウィルは彼に告げた。荷物については、あなたが救いの場所においでになるまで、我慢して担いで行って下さい。そこまで行けば、勝手に背中から落ちます。

そこで、クリスチャンは腰の帯を引き締め、旅の支度に取りかかった。すると、彼はこの門から多少行ったところで、インタープリター（注：解説）という人の家に着くから、その戸を叩きなさい、色々良いものを見せてくれるでしょう、ということ告げた。そこで、クリスチャンはその友人に礼を言い、彼は道中の安全を祈った。

[70] それから、彼はインタープリターの家に着くまで歩いていき、そこで何度も戸を叩いた。するととうとう誰かが戸のところまできて、どなたですか、と尋ねた。

クリス 私は旅人ですが、この家のご主人と親しい方に教わって、私自身のためになるように、ここに来ました。ですから、ご主人とお話がしたいのです。このように、彼はこの家の主人と会いたいと伝えたので、主人はしばらくするとクリスチャンの元に来て、何の御用ですか、と尋ねた。

[71] クリス 私は「滅亡の町」から来た者で、これからシオンの山に行くところです。この道の門に立っている人に、ここを尋ねれば、あなたがきっと旅路の助けになるような素晴らしいものを見せて下さると教わったもので。

[72] すると、インタープリターは言った。わかりました、お入りなさい。ためになるようなものをお見せしましょう。そこで、彼は使用人に、ロウソクに火をつけることを命じ、クリスチャンには、あとからついてくるように、と言った。そして、彼を秘密の部屋に連れて行き、その使用人に戸を開くようにと命じた。そして、戸が開かれたとき、クリスチャンは一人の極めておごそかな人の肖像画が壁の上にかかっているのを見た。それは目を天にあげ、手には書物の中で最高の物を持ち、唇には真の掟が書かれており、世界はその背後にあった。それはまるで、人々と議論するかのように立ち、黄金の冠がその頭に置かれていた。

クリス これは、誰ですか。

[73] インター この肖像画の人は、千人に一人と言われる人で、子供を生むことができ（ガラテヤ4:19）、生まれた時には自らその子供を育てることもできる（1テサロニケ2:7）のです。ご覧の通り、目を天にあげ、書物の中で最高の物を持ち、唇に真の掟が書いてあるのは、その仕事が意味のよくわからないことを明らかにして、罪人に解き明かすことだからです。人々と議論するかのようにして立っていることから分かります。

また、世界が彼の背後に投げ捨てられてあり、冠をかぶっているのは、彼がその「主人」に仕える奉仕を愛するあまり、現在のものを軽んじ斥け、来世には必ずその報いのための栄光を持つと信じていることを示しているのです。さて、とインタープリターは言った。私がこの絵を最初にお見せしたのは、この場所の「主」が、旅の途中であうかもしれない一切の困難に際して、あなたの道しるべとなるべき力を与えられた唯一のお方だからです。ですから、今私がお見せしたことに注意し、よく覚えていて下さい。なぜなら、旅の途中で、あなたを正しく導くような振りをする者にお会いするでしょうから。しかし、彼らの道は死に降りて行くのです。

[74] それから手を取り、大変大きな客間に連れて行ったが、それはかつて一度も掃除がされておらず、埃だらけであった。その様子をしばらく見回した上、インタープリターは使用人を呼んで掃除をさせた。さて、使用人が掃除を始めると、埃が舞って激しく飛び回り、クリスチャンは息がつまりそうになった。すると、インタープリターは側に立っていた娘に言った。ここに水を持ってきて、部屋に撒いておくれ。それを彼女が終えた後、その部屋は綺麗に掃除がなされた。

[75] すると、クリスチャンが言った。これはどういうことですか。

インター この客間は福音の素晴らしい恵みによって、聖別されたことのない人の心です。埃は人の全身を汚したところの生まれながらの罪と内心の腐敗です。最初に掃除を始めたのは「律法」です。が、水を持ってきて撒いたのは「福音」です。そして、ご覧になった通り、初めの方が掃除を始めると、たちまち埃が舞い上がり、部屋は彼によって清められず、あなたはほとんど息がつまりそうになった。これは律法というものが（その作用によって）こことを罪より清めるものではなく、それを見つけ出し、またそれを禁ずると同様に、かえって魂の中にそれを蘇らせ、力づけ、増やすというのは、罪を制圧するための力がないからである、ということをお見せするためです（ローマ7:6、1コリント15:56、ローマ5:20）

[76] また、ご覧になったように、娘が部屋に水を撒くと、清々しく清められました。これは福音がその素晴らしい貴い影響力をもって心に入った時、その時、いいですか、ちょうど私の娘が水を床に撒くことによって埃を静めたように、罪は制圧され、制服され、魂はその信仰によって清くされ、その結果、栄光の君を住まわせるに相応しいものとなるということをお見せするためです（ヨハネの福音書15:3、エペソ5:26、使徒の働き15:9、ローマ16:25-26、ヨハネの福音書15:13）。

[77] それから、夢の中で、私はインタープリターが彼の手を取って、小さな部屋に連れて行くのを見た。そこでは、二人の子供が各々椅子に座っていた。年上の方の名前はパッション（注：かんしゃく）で、もう片方の名前はペイシェンス（注：忍耐）であった。パッションはだいぶ不満であるかのように見えたが、ペイシェンスは極めて静かであった。すると、クリスチャンは尋ねた。なぜパッションは不満そうなのですか。インタープリターは答えた。彼らの親父が一番良い物を来年の始めにあげるから、それまで待てと言ったのですが、この子は何もかも今すぐ欲しいと言うのです。これに対し、ペイシェンスは素直に待っているのです。

すると、私は、一人の者が宝の入った袋を携えながら、パッションの元にやって来て、それをその足下にどっと注ぎだすのを見た。彼はそれを取り上げて喜び、それと共にペイシェンスを嘲笑った。しかし、しばらくの間見ていると、彼はそのすべてを使い果たし、もはやぼろ切れの他には何も残されていなかった。

[78] すると、クリスチャンはインタープリターに言った。このことを少し詳しく説明して下さい。

インター この二人の少年は比喩です。パッションは現世の人の、ペイシェンスは来るべき世界の人の比喩です。なぜなら、ご覧になったように、パッションは今、今年、すなわちこの世の中で、全てのものを持つとします。この世の人も同様です。彼らは、良いものを今すぐ持たないと気が済まず、自分らの分け前を来年まで、すなわち来世まで待つことができない。彼らにとっては「手の中の一羽の鳥は茂みの中の二羽に値する」というあのことわざが、来るべき世界の利益に関する一切の神の証よりも、権威を持っているのです。しかし、あの子がすべてのものをすぐ使い果たし、やがてぼろ切れだけになってしまったように、こういう人々もまた、この世の終わりには同じようになります。

クリス 今、私はペイシェンスが最も優れた知恵を持っていることがわかりました。それにそう思う理由がいくつかあります。まず、彼は最も良いものを持っているから。次に、相手がぼろ

切れの他何も持たない時に、彼の栄光を持つでしょうから。

[79] インター いや、その上にもう一つ加えることができます。すなわち来世の栄光は決して消滅したりしません。ところが、他方はたちまちのうちになくなってしまふのです。ですから、パッションは彼の良い物を最初に持っているからといってペイシェンスを笑う理由はあまりないのです。なぜなら、ペイシェンスは最も良い物を最後に持ったからという理由で、パッションを笑うことになるのですから。すなわち、最初は最後に席を譲らなければなりません。最後は必ずやってくるのですから。しかし最後は何者にも席を譲らないのです。後に続くべきものがないのですから。ですから、最初に分け前を持つ者は、それを費やすべき時を持たなければなりません。しかし、最後にその分け前を持つ者は永久にそれを持たなければなりません。ですからダイビーズ（注：金持ち）についてこう言われています。『おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。』（ルカの福音書16:25）

クリス なるほど、今ある物を欲しがらないで、来るべき物を持つ方が良いということがわかりました。

インター その通りです。そして、『見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続く』（Ⅱコリント4:18）とある通り、肉欲と現在のものとはお互い極めて近い間柄であり、肉欲と来るべきものとはまるで知らない間柄ですから、肉欲と親しくすることは現在のものと親しくなることであり、来るべきものとの距離を置くことになるのです。

[80] それから、夢の中で、インタープリターがクリスチャンの手を取って、またとある所へ連れて行くのを見た。そこには壁を背にして火が燃えていた。その側には一人の者が立っていて、それを消そうとして継続して大量の水をかけている。しかし、火はますます高く、ますます燃え勢いを強めるのであった。

すると、クリスチャンは言った。これはどういうことですか。

[81] インタープリターは答えた。この火は心の中に作用する神の恵みの御業です。それを消し止めようとしてその上に水をかけているのは悪魔です。それにも関わらず、ご覧の通り、火はますます高く、熱く燃えている。このことについては、さらに理由をお見せしましょう。こう言って、彼を壁の後ろ側に連れて行った。すると、そこには一人の人が手に油の入った器を持ち、それを火の中に絶えず、人知れず、黙々とかけているのを見た。

すると、クリスチャンは言った。これはどういう意味ですか。

[82] インタープリターは答えた。これはキリストです。絶えずその恵みの油で、既に心の中になされた御業を維持されるのです。ですから悪魔がどんなことをしようと、その民の魂はいつまでも恵みに満ちているのです（Ⅱコリント12:9）。またご覧の通り、この人が火を絶やさないように壁の後に立っているのは、惑わされた者にとっては、どのようにしてこの恵みの御業が靈魂の中に維持されるかということを見るのが困難であるということを理解するためです。

私はまた、インタープリターが再び彼の手を取って、外観も美しい壮麗な宮殿の建っている、楽しそうな場場所に行くのを見た。これを見て、クリスチャンは大いに喜んだ。彼は、その頂上に全てが黄金の衣を着た二、三人が歩いているのを見た。

すると、クリスチャンが言った。あそこへは入れますか。

[83] そこで、インタープリターは彼を連れてその宮殿の入り口へ行った。すると、なぜか、入り口には大勢の人が立っていて、中へ入りたがっているのだが、思い切って入り込む者はいなかった。戸口から少し離れたところにあるテーブルには、一人が一巻の書物とインクつぼを前にして座り、そこへ入って来る者の名を書きとめようとしていた。入口には護衛ために鎧を着た多数の人々が立っていて、入って来る者に出来る限り傷害と災害を与えようと決意の色を示しているのを見た。今やクリスチャンはあつけにとられてしまった。とうとう皆が武装した人々の恐しさにたじろいだ時、クリスチャンは、大そう強そうな顔つきをした一人の男が名を書くためにそこに座っている人の所へつつかつかと進んで行って、「私の名を書いて下さい」と言ったのを見た。その男の名の記名が終わると、彼は剣を抜き、頭に兜を被り、入り口の方へ突進して、武装した人々に向って行き、彼らもまた恐い勢いで彼に襲いかかるのを見た。しかし、この男はすこしも怯まず、猛烈に斬り倒し、薙ぎ倒した。こうして自分と彼らに多くの傷を残し、彼はその人々のすべての中に道を斬り開いた（使徒の働き14:22）。更に進んで宮殿に迫ると、それに対して、中にいる人々からも、宮殿の頂を歩いている人々からも、楽しげな声がきこえた。入って来い、入って来い、永遠の栄光をあなたに得させよう、と。

そこで、この男は入って行き、彼らと同じような衣を纏った。すると、クリスチャンはにっこりと笑って言った。私はこの意味がよく分かりました。

[84] それでは、とクリスチャンは言った。そろそろ出発します。いや、お待ちなさい、とインタープリターは言った。もう少しお見せするものがありますから、その後で出発されたらどうですか。そこで再び彼の手を取って、かなり暗い部屋に連れて行った。そこに一人の男が鉄の檻の中に座っていた。

その男は大変悲しそうにしていた。眼を伏せて地面を眺めながら座り、手を組み合せ、肺も破れんばかりにため息をついていた。すると、クリスチャンは言った。これはどういうことですか。それに対してインタープリターはその男と話をするように、と言った。

そこで、クリスチャンはその男に言った。どうしたのですか。男は答えた。私はすっかり変わってしまったのです。

[85] クリス かつてはどのような人だったのですか。

男 かつては自分の目で見ても他人の目に見るところも共に立派な、元気旺盛な信徒（注：カルヴァニズムの信徒）でした。かつては、われながら「天の都」に入れる望みのある者だと思いき、いつもそこに行くことを想っては喜んだことさえあったのです（ルカによる福音書8:13）。

クリス それで、今はどういう状態なのですか？

男 今は絶望しています。この鉄の檻の中に閉じ込められているように、絶望の中に閉じ込められています。私は外に出ることが出来ない。ああ、今は出来ないのです。

クリス でも、どうして又こんな状態になってしまったのですか。

男 目を覚まして身を慎む（1テサロニケ5:6）ことを止めたのです。情欲の欲するままに任せました。私は「言葉」の光（ヨハネの福音書1:1-5）と神の情け（ローマ2:5）に対して罪を犯しました。私は精霊を悲しませました。で、彼は立ち去ってしまいました。私は悪魔を誘いました。で、彼はやって来ました。私は神を怒らせました。で、神は私をお見捨てになったのです。私は心を頑なにしてしまって、悔いることが出来ないのです。

[86] すると、クリスチャンはインタープリターに言った。このような人にはもう望みは無いのですか。尋ねてみて下さい、とインタープリターは言った。

インター あなたには何の望みもなく、絶望の鉄の檻の中に監禁されていなければならないのですか。

男 はい、全く何の望みもありません。

クリス でも、「ほむべきもの」の子（マルコの福音書14:61、注：神の子イエスキリスト）は極めて憐れみの深い方です。

男 しかし、私は私自身のために彼を新たに十字架につけました（ヘブル書6:6）。私はその人格を軽蔑しました（ルカの福音書19:14）。私はその正義を軽蔑しました。私は「その血を汚れたもの」と考えました。私は「御恵みの聖霊に侮辱」を行いました。（ヘブル書10:28-29）。ですから、私は一切の約束から締め出され、今、私に残っているものはただ、確実な審判と一人の敵として私を焼きつくすであろう烈火のような憤激の脅迫、もの凄い脅迫、恐しい脅迫があるばかりです。

[87] インター なぜあなたはこの状態になられたのですか。

男 情欲と快樂とこの世の利益のためです。それを得れさえすれば多くの喜びがあるものとそ

の時は期待していました。ところが、今では、それらのものがどれもこれも私を蝕み、激しい毒虫のようにかじりつくのです。

クリス でも、今悔改めて、立ち返ることが出来ないのですか。

[88] 男 神は私の悔い改めを拒まれたのです。神の御言葉は私には信じるための励ましを与えて下さいません。それどころか、神御自身、私をこの鉄の檻に閉じ込められたのです。又、世界中のすべての人々は私をここから外へ出すことが出来ないのです。ああ、永遠！永遠！永遠の中で迎えなければならない苦しみと立ち向かうにはどうすればいいのか！

インター そこで、インタープリターは、クリスチャンに言った。この人の苦しみをよく覚えて、いつまでもあなたの戒めとするのですよ。

クリス うむ、これは恐いことです。神のお助けを受けて目を覚まし、落ち着き、そうしてこの人の苦しみの原因を取り除くことが出来るように祈りたいと思います。それはそうと、もうそろそろ出発しなければならない時ではないでしょうか。

インター もう一つのものをお見せするまでお待ちなさい。その上で出発されたら良いでしょう。

[89] すると、彼は再びクリスチャンの手を取って一つの部屋に連れて行った。そこでは一人の男が寝床から起きてくるところであった。が、着物を着る時に、その男はがたがたと震え、おののいていた。すると、クリスチャンは言った。何故この人はこのように震えているのですか。そこで、インタープリターはその男に、わけを告げるように言った。それで、彼は話し始めた。今夜、眠っている時に私は夢を見ました。すると、どうでしょう、天は真っ暗になりました。それはそれは恐しく雷が鳴り、稲妻が光り、そのために私は苦しくなりました。それで、夢の中で、上を見上げますと、雲がいつにない速さで飛んでいます。すると、大きなラッパの音を聞きました。そして、一人のお方が、天の数千の者に寄り添われ一つの雲の上に座るのを見ました。人々は皆燃えたぎった火の中におり、天も燃える炎の中におりました。私はその時、一つの声が「起きよ。死人たちよ、起きて審判のために来い」と言うのを聞きました。それと共に、岩は裂け、墓は開かれ、その中にいた死人が出て来ました。そのうちある者は大変喜んで上を眺めていました。またある者は山々の元にその身を隠そうとしました（Ⅰコリント15:52、Ⅰテサロニケ4:16、ユダ14:15、ヨハネの福音書5:28、Ⅱテサロニケ1:7-8、黙示録20:11-14、イザヤ書26:21、ミカ書7:16-17、詩篇50:1-3、ルカ書7:10）。その時、雲の上に座った方が書物を開いて世界の民に近寄れと命ずるのを見ました。その前から流れ出で、溢れ出ている激しい炎と共に。ちょうど法廷の裁判官と囚人の間にあるような程度の隔たりがありました。また、雲の上に座っていた人が近づく者へ宣言するのを見ました（マラキ書3:2-3、ダニエル書7:9,10）。「毒麦ともみ殻と切株（注：つまらないもの）を集めて燃える火の海に投げよ」と（マタイの福音書3:12,13,30、マラキ書4:1）。それと共に、底が見えないほどの穴がちょうど私の立っていたあたりに開かれました。その口からは大量の煙と燃える炭火が凄まじい音を立てて出て来ました。又、同じ人々に「わが小麦（注：良いもの）を倉に収めよ」という声がかかりました（ルカの福音書3:17）。又、それと共に多くの人々が雲の中に引きあげられ、運び去られるのを見ましたが、私は後に残されました（Ⅰテサロニケ4:16-17）。私は、私の身を隠そうとしましたが、隠すことが出来ませんでした。というのは、雲の上に座っていた人がいつまでも私から目を離さなかったからです。

そのうち、自分の罪を思い出してきました。そして、私の良心はあらゆる方面から私を責め立てました（ローマ書2:14:15）。ここで、私は夢から覚めたのです。

[90] クリス でも、なぜその光景をそんなに恐ろしく感じたのですか。

男 なぜって、私は審判の日に対する用意が出来ていないからです。それに天使が何人も拾い上げたのに私を後に残したこと、地獄の穴がちょうど私の立っていたところに口を開いたことが原因です。私の良心も私を苦しめました。それから「裁判官」が顔に怒りを示しながら、いつまでも私から目を離さないように感じました。

[91] すると、インタープリターはクリスチャンに言った。これらについて何を思いましたか。

クリス 希望と恐怖を感じました。

インター そうですか、ではこれらすべてのことを心にとどめておいてください。あなたが行かなければならない道において、あなたを先へ先へと誘導する刺激となるように。

そこで、クリスチャンは腰の帯を引き締めて旅の準備にとりかかった。するとインタープリターは言った。クリスチャンさん、「慰さめるもの」（注：精霊）がいつもあなたと共にいて、「都」への道にあなたを導いて下さいますように。

こうして、クリスチャンはその旅路についた。このように呟きながら。

私は珍しいもの、良いものを見た。楽しいもの、恐ろしいもの、旅路で挫けないようにするものを。

それらを思い、私に教えてくれた理由を考えつつ、インタープリターに感謝しよう。

[92] さて、私は夢の中で、クリスチャンが行くべき道は左右を壁で囲まれており、その壁は「救い」と呼ばれているのを見た（イザヤ書26:1）。この道を、重荷を負ったクリスチャンは走った。しかし、その背中に荷物があつたために、楽なことではなかった。

[93] 彼はこうして多少上り坂になるところまで走った。すると、その場所には十字架が立っていて、少し下の辺りに石の棺があつた。そこで、私は夢の中で見たのだが、クリスチャンがその十字架に辿り着いたちょうどその時、彼の荷物は肩から緩んで背中から落ち、それから転がり出し、ころころと転がり続けて棺の入り口まで来るとそこへ落ちてしまい、影も形も見えなくなった。

[94] そこで、クリスチャンは喜び、晴れ晴れとして、愉快的心もちで言った、「彼はその悲しみによって私に憩いを下さり、その死によって生命を下さったのだ」と。そこで、しばらくの間、じっと立って眺め、不思議に思っていた。十字架を見るだけでこのように重荷を取れたのが、極めて驚くべきことであつたからである。彼は、眺めてはまた眺めていると、ついに頭の中の泉がその頬をつたって水を作り出した（ゼカリヤ書12:10）。さて、彼が眺めながら泣きつつ立っていると、三人の「輝やくもの」（注：天使）が彼のところへ来て、「平安があるように」と挨拶した。

そこで、その第一の者が彼に言った。『あなたの罪は許されました』（マルコの福音書2:5）。第二の者は自身のからだから剥ぎとって『礼服』を着せた（ゼカリヤ書三・四）。第三の者は彼の額に印をつけた上、封印のついた巻物を手渡して急いで行く道の途中でそれを読みなさい、そして「天の門」でそれを差し出すようにと言った。そこで彼らは立ち去った。

すると、クリスチャンは喜びのあまり三度飛び上がった。そして歌いながら進んで行った。

ここまでは罪の重荷を負ってきた。ここに来るまでは嘆きを軽くするものなど何もなかった。ここはなんと素晴らしい場所だろう。ここで祝福が始まった、ここで背中荷が落ちた、ここで私に荷を縛っていた紐は絶たれたのだ。十字架、棺、さらに私のために恥を受けたどなたか、なんと感謝すれば良いのか。

[95] その時夢の中で、彼が山のふもとへ向かって行くのを見た。そして、彼は道を少し離れたところに、三人の男が足かせをつけて眠っているのを見た。その一人の名はシンプル（注：無知）、もう一人はスロース（注：怠惰）、三人目はプリザンプション（注：無謀）であった。

クリスチャンはこの時、彼らの目を覚ましてあげようと思って、叫んだ。あなた達はまるで船のマストの上で眠っているような状態ですよ。「死の海」が、底のない深海があなた方の下にあるのですから（箴言23:34）。だから、目を覚ましてこちらへ来て下さい。お望みならその足かせを取るのを助けましょう。もし「吠えたける獅子のようにめぐり歩く」者（注：悪魔）が通りかかったら、あなた方はその歯の餌食になりますよ（1ペテロ5:8）。そうすると、彼らは目を覚まして彼を見た。シンプルは言った。「別に危なくないですよ。」スロースは言った。「もう一眠りしたい。」プリザンプションは言った。「樽それぞれの底に座る（注：諺。「田で食う虫も好き好き」に近い）というじゃないか。とにかくもう関わらないでくれ。」そして彼らはまた眠るために横になった。そこで、仕方なくクリスチャンは出発することにした。

[97] しかし、あの危険な状態にあるのを気付かせる為に注意してあげたり、足かせを取る手伝いをしようと伝えたりして、彼らはあれほど心から助けようという親切を、まるでありがたいとも思わなかったことを考えると面白くなかった。そんなことを考えているところへ、彼は二人の男が狭い道の左側の壁を越えて転げ落ちるのを見つけた。彼らは急ぎ足で彼のところへやって来た。その一人の名はフォーマリスト（注：形式主義）であり、今一人の名はヒポクリシー（注：偽善）であった。そして、この二人は彼に近寄り、彼は話を切り出した。

[98] クリスチャン 皆さん、どちらからおいでになったのですか。またどちらへ行かれますか。  
フォーマ&ヒポ 私たちは「ひとりよがり」の国に生まれたもので、神を讃えるためにシオンの山へ向かうところです（詩篇9:1）。

クリスチャン なぜこの道の始まる場所に立っている門を通過して入って来られなかったのですか。門より入って来ないで『ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です』と記されているのをご存知ですか（ヨハネの福音書10:1、新改訳）。

フォーマ&ヒポ 入口を通過して門へ行くのは私達の国ではあまりに遠い回り道だと考えられています。だから近道をして、先程のように壁を乗り越えたのです。

クリスチャン でも、それは私達がこれから行こうとする都の主君に対する犯罪とは考えられないでしょうか。そのように彼の明確な意志を犯すということは。

[99] フォーマ&ヒポ それについては、そんなに頭を悩ます必要はないと思います。なぜなら、私達の行ったことには慣習があるからです。しかも、もし必要なら一千年以上もそれが続いているといふことを証明する書類を出すことができます。

クリスチャン でも、あなた方の観衆は訴訟の際に有利になるものでしょうか。

フォーマ&ヒポ この慣習は一千年以上も長続きしたものであるから、どんな裁判官でも公平

な者であれば合法的なものとして容認することは疑いを容れないと思います。それに、私たちはもうすでに道に入っているのですから、どんな方法で入ったということなどが問題になるでしょうか。入っていれさえすれば良いのです。門から入って来られたあなたも、壁を越えて入り込んだ私たちも同じ道にいるのです。さあそれでは、あなたの身の上が私たちよりも優っていると一体どうして言えますか？

クリスチャン 私は「主人」の規則に従って歩いています。あなた方は勝手な空想の不作法な働きに従って歩いておられる。あなた方は既に、この道の「主」から盗人と考えられています。ですから、もし道の果てに達しても、まともな人と認められるとは思いません。あなた方はその指図を受けないで勝手に入って来られた。また、その恵みを受けないで勝手に出て行かれるでしょう。

[100] これに対して二人はほとんど何も答えなかったが、ご自身のことをお構いなさい、と言った。そして、私は彼らが互いにあまり話を交わさず、それぞれ勝手に歩いて行くのを見た。この二人の男はクリスチャンに、律法と儀式については彼と同じようにきちんと行うことは疑う余地のないところだと話していた。だから、あなたが着ている上着の他には、どの点で私たちと異なるのか分かりません、またその外衣といっても、あなたの裸の恥を隠すために近所の方のどなたかに頂いたものでしょう、とも話していた。

[101] クリスチャン 律法と儀式では救われません、戸を通して入って来られなかったのですから（ガラテヤ書2:16）。それから、この上着は私がこれから行く場所の「主」が下さったものです。これはおっしゃる通り私の裸の恥を覆うためです。私はそれを「主」が私を愛して下さっている印と考えています。その前にはぼろしか持っていなかったのですから。そして、私はこのように自分を元気づけるのです。都の門に着いた時、その「主」は私が善良な者であることを言って下さるでしょう、私がこの上着を着ているのですから。彼が私のぼろを脱がせて下さった日に惜しげもなく下さったこの上着を。その上、私は額に記徴をつけています。あなた方は恐らくお気づきにならなかったでしょうが、私の荷物が肩から離れた日に「主」の極めて親しい方々の一人が付けて下さったのです。しかも、道に行く途中で読んで力をつけるために、封印をつけた巻物まで頂きました。更に、「天の門」まで行った時、そこで確実に入ることができるようにこれを手札として渡すように、と言われております。あなた方はこれらを一つもお持ちでないでしょう。お持ちでないのは、門から入って来られなかったからです。

[102] これらのことに対して二人は何とも答えず、お互いの顔を見合わせて笑った。そして、私は皆が先へ進んで行くのを見た。クリスチャンは常に先頭を歩き、独り言以外は何も喋らなかつた。それも、時にはため息をつきながら、時には励まされながら。彼は「輝く方」に頂いた巻物を読み、それで元気を回復するのであった。

[103] そして私は、皆が先へ先へと進んで、ついに「困難の丘」のふもとへたどり着いたのを見た。そこには泉があった。また門からまっすぐに続いて来た道のほかに、二つの他の道があった。一つはふもとのところを左手に周り、もう一つは右手に迂回するものだった。この狭い道はそのまっすぐに丘を上っていく道であり、この道は「困難」と呼ばれていた。クリスチャンは元気を付けるために、泉へ行ってその水を飲み（イザヤ書49:10）、その丘を上り始めた。

このように呟きながら。丘が高くとも、私は登ろう。これらは私にとって問題ではない。生命へと続く道であるから。さあ、勇気を奮い起こし、気落ちせず、恐れを取り除こう。簡単な道を通して出口を間違ふよりも、大変な道を通して正しい出口にたどり着く方が良いだろう。

[104] さて、他の二人も丘のふもとに着いた。しかし、ここは険しく、高かったので、そのふもとを通る道を見つけたとき、これらは丘の向こう側でひとつになるだろうと思い、簡単な方の道に行くことにした。ところが、その道のひとつの名は「危険」であり、他方の名は「破滅」であった。それで、一人は「危険」の道を行き、大きな森に入っていった。また、もう一人は「破滅」の道を即座に選び、暗い起伏の激しい荒れ野に入り込み、そこで彼はつまずいて倒れ、ついに起き上がることは無かつた。

[105] それから、クリスチャンの後を追って、丘を登っていくのを眺めていると、そこはあまりに険しい為、最初は走っていたが、次第に歩き、ついには這っていくのが精一杯の様子であった。

さて、この丘の中程に行く道の途中では、丘の「主」が作られた、疲れた旅人の元気を回復する為の休憩所があった。そこへクリスチャンが辿り着き、体を休める為に腰を下ろした。そして懐から巻物を取り出し、それを読んで心を慰めた。さらに、十字架の側に立っていた時に頂いた上着を改めて眺めた。しばらくはこうして心を喜ばせていたが、次第に眠くなり、遂には夜になるまでぐっすり寝入ってしまった。すると、眠っているうちにその巻物は彼の手を離れていってしまった。さて、彼が眠っていたとき、そこに一人の人が来て起こした。「なまけ者よ。蟻のところへ行き、そのやり方を見て、知恵を得よ」（箴言6:6）と言いながら。それと共に、クリスチャンは跳ね起き、出発早々から歩調を早めて丘の中程に達した。

[106] さて、彼がそこに達した時、こっちに向かって一心不乱に走ってくる二人の男がいた。一人の名はティモラス（注：臆病）で、もう一人の名はミストラスト（注：不信）であった。彼らに対してクリスチャンは言った。あなた方はどうされたのですか。間違った道を走っておられますよ。ティモラスは答えた。先に行った人々はシオンの都に行くためにこの困難な場所を上りましたが、先へ行けば行くほど大きな危険が待ち構えていることは明らかです。ですので、私たちは逆戻りをしているのです。

そうなんです、とミストラストは言った。だって、私たちのすぐ目の前に二頭の獅子が道に横たわっていたのです。眠っていたのか目覚めていたのかは分かりません。ですが、もし目覚めていたら、獅子らに近寄ったとたんに八つ裂きにされるでしょう。

[107] クリス 確かに、そのお話を聞いたら怖くなりましたが、逃げるとしてもどこに逃げたら良いと思いますか。私の国に立ち返るとすれば、その国は火と硫黄にいずれ焼かれ、私がそこで滅びることは確実です。「天の都」に辿り着くことができれば、そこは安全であることを確信しています。とにかく、やってみなければなりません。立ち返ることは死であってそれ以外には何もなく、先に進むことは死の恐れ、またその先にある永遠の命です。私はなお先に進もうと思います。そして、ミストラストとティモラスは丘を走り下り、クリスチャンは出発することになった。しかし、今さっき二人が言ったことを考えながら、巻物を読んで慰めを得ようと、それを求めて懐に手を入れた。しかし、探してもそれを発見することはできなかった。すると、クリスチャンは苦しみ途方にくれてしまった。いつもその不安を和らげてくれたもの、また「天の都」に入るための通行権となるべきものを無くしてしまったからである。ここに至って、完全に思案に暮れ、どうしたらよいのか分からなくなったが、やっと彼は丘の中程にある四阿で眠ったことを思い出した。そして、ひざまづいて愚かな行為に対する神の赦しを乞い、それから巻物を探す為に戻っていった。しかしながら、戻る道でのクリスチャンの心の悲しみを誰が十分に言い表すことができようか。時にはため息をついた。時には泣いた。また、その疲労を休め元気を回復する為に建てられたあの場所で眠ってしまうなどという愚かな行為について我が身を叱りつけた。それで、こうして彼は後戻りをしていった。道すがら、何度か巻物をひょっとして見つけることもあろうかと、あちこちに目を配りながら。やがて、彼が腰を落として眠ったあの四阿が再び

見える所まで辿り着いた。しかしそれが見えると、彼が非常に悪いことをしたことをまた思い出すことになり、その悲しみは増し加わったのである（黙示録2:5、1テサロニケ5:7-8）。こうして、彼はその自分の犯した罪深い眠りを嘆きながら、道を下っていった。このように呟きながら。真っ昼間に眠るとは。困難の最中に眠るとは。この丘の「主」が旅人達の気力を回復する為にお建てになった憩いを、自分の肉の安息に用いるまでに肉のことに耽るとは。ああ、私はなんと「みじめな人間」だろう（注：ローマ7:24）。

[108] 幾歩私は無駄足を踏んだことであろう。イスラエルの民にも彼らの罪の故に、このようなことが起こった。彼らは紅海の道を通って再び追い返された（注：民数紀14:25）。私もこの罪深い眠りがなかったならば、喜びをもって踏んだはずのその歩みを悲しみをもって踏んでいる。この頃にはどれぐらい遠くまで進んでいたであろう。たった一度しか踏む必要のなかった道を三度踏まされているのだ。それどころか、今や私は行き暮れようとしている。今日は殆んど過ぎてしまった。ああ、眠らなければよかった。

[109] さて、この頃には再び四阿へ辿り着き、そこでしばらくの間は腰を落として泣いた。しかし、悲しく腰かけ下を見下しているとそこに巻物を見つけた。それで、わなわなと慌てながら、大急ぎで取り上げ、懐にそれを納めた。だが、この人が再びその巻物を手に入れた時の喜びはどれ程であったかを誰が言うことが出来よう、この巻物こそはその生命の保証書であり、望む港という入港許可書であったから。そこで、それを懐にしまい込み、眼を巻物が落ちていたいたところへ向けて下さったことに神に感謝を捧げ、喜びと涙で再びその旅路に戻った。しかし、ああ、どんなに軽やかに丘の残りの道を登って行ったことであろう。それでも、丘の中程へ登る前には日は沈んでしまった。これは、自分の犯した眠りの後悔を再び思い起こさせ、そこで、このように彼はその身を悔い改め始めた。ああ、罪深き眠りよ、あなたのゆえに、私は旅路に行き暮れようとしているではないか。私は太陽なしに歩かなければならぬ。闇は足の踏む道を覆わなければならない。罪深き眠りのおかげで、私はまたしても恐ろしい猛獣の声を聞かなければならないのだ、と（1テサロニケ5:6-7）。今や、彼はミストラストとティモラスが彼に告げた話、人が獅子を見て恐れに捕われたという話を思い出した。すると、クリスチャンは心の中で思った。ああいう猛獣は夜に餌食を求めて彷徨する。もし闇の中で出くわすようなことがあればどうすれば対抗できるだろう。どうすれば八つ裂きになることを免れることができるだろう。このように考えながら道を辿って行った。しかしながら、こうしてその不幸な過去を嘆いている間にふと目をあげると、その辺りにその名を「美」と構える大変立派な宮殿が立っていた。しかもそれは大通に面してそのすぐ側にあった。